中国におけるネット依存症青少年の回復教育プログラム
――南昌鴻傑少年学校を事例として――

張　亜　権
松　野　良　一

Rehabilitation Program for Young People with Internet Addiction in China: The Case of Nanchang Hongjie Young People School

Yaquan ZHANG
Ryoichi MATSUNO

Summary

Recently, many rehabilitation programs or schools for internet addiction have been established in China, but their educational techniques are unclear. Sometimes, newspapers have reported cases of accidents and deaths of students at these places. The purpose of this research is to clarify the present conditions of such programs and schools using the case of Nanchang Hongjie Young People School, on which the famous movie “Internet Mama” is based, and is the most progressive school for internet addiction rehabilitation.

After researching, we found that there are four types of rehabilitation programs and confirmed that Nanchang Hongjie Young People School's program is the most progressive. The school has evaluation criteria for internet addiction and provides two types of education: military training and psychotherapy. The president of school explained three features of students with internet addiction: 1) tendency to escape from reality, 2) lack of communication skills, and 3) unhealthy relationship with their parents. The school has six fundamental principles aimed at respecting the student’s personality and human rights.

However, the school faces certain problems, such as financial difficulties and the lack of attention of parents after the students return home. The results of the rehabilitation program are positive; however, since parents do not show interest in their child’s behavior, students often become re-addicted.

Key Words
Internet Addiction, Social Work, Rehabilitation, Military Training, Psychotherapy

目　次

1．問題の所在
2．先行研究
3．中国におけるネット依存症の回復教育プログラム（研究１）
4．南昌鴻傑少年学校の回復教育プログラム（研究２）
5．結　論

１．問題の所在

1.1　研究の動機

近年，中国国内において，ネット依存症青少年回復学校がたくさんできてきた．しかし，その実情はよくわからない．新聞報道などによれば，訓練中に多数の生徒が死亡している．著名な事件について，振り返ってみる．

2007年，重慶大東方行走学校で，男子生徒が長期間にわたって殴られて，自殺未遂した．その結果，学校は閉鎖された[1)]．

彼は，痔の治療薬である過マンガン酸カリウムを飲んだ上，自殺しようと，学校の校舎２階から飛び降りた．病院に運ばれた後，教官から殴られた傷跡が，体中から発見された．彼の母親は，すぐに重慶公安局に通報した．その後，重慶教育局は，重慶大東方行走学校の資格を取り消し，学校を閉鎖した．

2008年，新疆華龍青少年成長研究中心で，男子生徒が訓練の途中，死亡した．その結果，学校は閉鎖された[2)]．学校が組んだ組織活動で，ある生徒が，ルールに違反して懐中電燈を取り出した．教官がそれを発見し，部屋に監禁した．生徒は，トイレがないので，ルームメートのボトルに排尿してしまった．ルームメートは，教官に通報した．教官２人は，排尿した生徒の尻をベルトで叩いた．彼が謝っても，教官は殴り続けた．翌日，生徒は亡くなった．

2009年８月２日に，南寧起航挽救訓練営で，15歳の男子生徒が教官に殴られて，死亡した[3)]．中国中央放送局の番組「今日説法」は，この事件を扱った「ネット依存少年の死亡」というドキュメンタリーを放送した．生徒が，ランニング訓練に付いて来れなかったため，教官に徹夜で殴られて，亡くなっていた．

2012年，武漢にある行走学校で，14歳の男子生徒が，ネット依存症回復プログラムの残酷な訓練から逃げるために，シャープペンシルの芯を食べ，自殺しようとした[4)]．原因は，指導教官から酷く殴られたからだった．

現在の中国には，ネット依存症回復学校やプログラムが多く存在する．中国社会の世論は，死亡事件を引き起こす軍事訓練のような方法は，青少年の成長にとって良くないと反発した．こうした軍隊的方法，体罰も，回復の１つの手段だという主張もなされているが，少年の死亡事故，事件が発生するような方法は，現代社会では認められない．

1.2　研究の背景

1978年以降，中国の改革開放の政策とともに，中国各地で都市化が進んだ．都市化の進展によって，北京，上海など大都市に，新しいコミュニティーができ始めた．以前のコミュニティーは，ほぼ同じ村落の人たちだった．人が長い時間同じ地域に住み，人と人の間に絆や信頼が生まれていた．しかし，今，多くの人にとって，近所の人は，ほとんど見知らぬ人であり，親しさがない．1979年に始まった一人っ子政策によって，子どもがあまりにも大事にされてきた．都市化が急激に進んだ環境で，子供はおろか，大人も近所の人とのコミュニケーションをとることができなくなった．

一方，中国では，1997年からデジタルインフラが急速に普及した．それに伴って，大勢の人々がインターネットを使用するようになった．確かに生活は便利になった．インターネットで新聞を読む，テレビを見る，買物をすることができるようになった．ところが，インターネットの発展には，光と陰の部分がある．陰の部分の１つが，ネット依存症とされている．

デジタル時代となった今，中国の青少年たちは，学校が終わるとすぐに家に戻って，ずっと部屋にいて，テレビをみたり，インターネットをしたりして，外で遊ぶことは，ほとんどない．学校でも，進学のために，授業が引き延ばされて，休憩時間が少なく，宿題も多い．さらに多くの青少年は，週末に，塾に行く．仲間と遊ぶ時間が少なく，ストレスがたまる．これが現在における中国青少年の実態である．

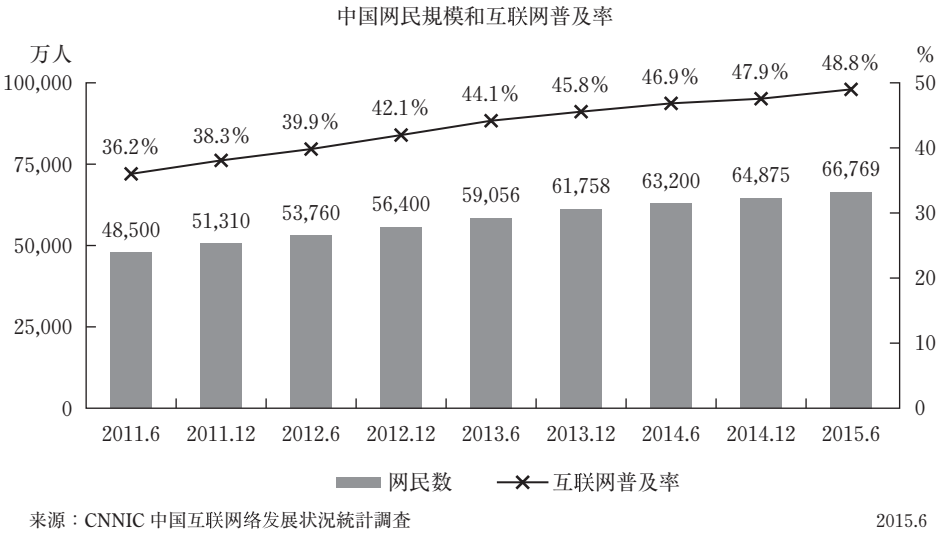

図１　中国インターネット利用者の人数と普及

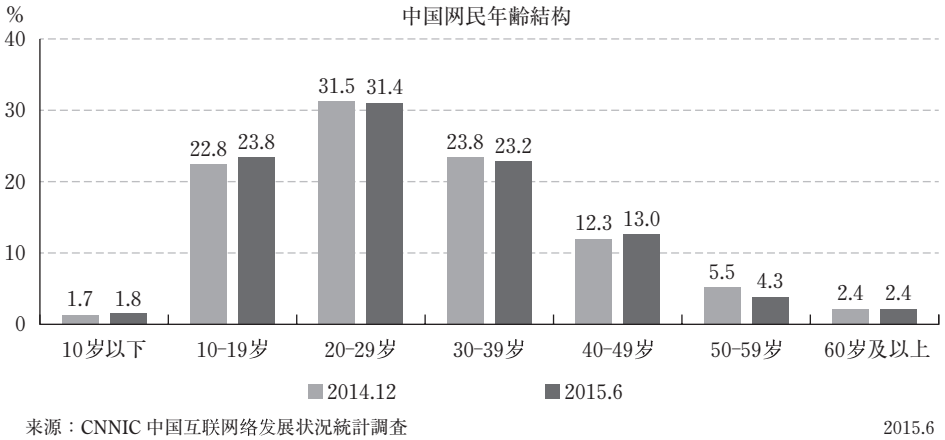

図２　中国インターネット利用者の年齢構成

その結果，ネットゲーム等で遊び，ストレスを解消したいと思う．結果的に，ネット依存症になる青少年が増加しているとされる．

中国 CNNIC（China Internet Network Information Center）の『第36回中国インターネット発展状況統計報告』（**図１**）によると，2015年６月までに，中国インターネット利用者の人数は約6.7億人に到達している[5]．そのうち，30歳以下のインターネット利用者は，全体利用者の50％以上に至っており（**図２**），青少年はインターネット利用者の重要な部分を構成していることが明らかになった[6]．

中国青少年インターネット協会は2009年に，中国国内の青少年のネット依存に関する調査を行った．その結果，中国国内において，ネット依存症傾向の青少年が3,400万人を超えていることが明らかになった．同協会は，ネット依存症は中国青少年問題の深刻な課題であると指摘した[7]．

1.3　研究目的

本研究の目的は，２つある．

① ネット依存症の回復教育プログラムの実情

を明らかにすること．

今，中国で，ネット依存症青少年を回復させる学校やプログラムの数は，年々上昇している．現状として，どのような学校や教育プログラムがあるのか，その実体を明らかにしたい．

② 南昌鴻傑少年学校の回復教育プログラムについて現地調査を行い，その実情を明らかにすること．

ネット依存症からの回復教育プログラムの中でも，最も進んでいると思われる南昌鴻傑少年学校について，現地を訪れて調査を行うことで実際の状況を明らかにしたい．

2．先 行 研 究

2.1　インターネット依存症の出現と発展

インターネット依存症は，アメリカ心理学者のアイヴァン・ゴールドバーグ（Ivan Goldberg）によって発見された．彼は1994年に，インターネット依存（Internet Addiction）と名付けて提案した．1997年には，「病的なインターネット利用」（Pathological Internet Use）と改名した[8]．

ゲッツバーグ大学の臨床心理学者キンバリー・ヤング（Kimberly S. Young）は，インターネット依存症は，アルコールや薬物への依存とは異なり，身体依存が起こらないという意味では，あくまでアナロジーとしての依存であり，臨床的には，ギャンブル依存と同様，行為の過程への依存と見なされるとした[9]．

アメリカ精神医学会が出版した『精神障害の診断と統計マニュアル』（DSM-4）では，インターネット依存は，「特定不能の衝動制御の障害」に分類されている[10]．世界保健機関（WHO）が作った『疾病及び関連保健問題の国際統計分類』（ICD-10）でも，インターネット依存は「習慣および衝動の障害，特定不能のもの」に分類されている[11]．

インターネット依存症とは，実生活における人間関係を煩わしく感じたり，通常の対人関係や日常生活の心身状態に弊害が生じているにも関わらず，インターネットに精神的に嗜癖してしまう状態であると説明されている．

インターネット依存に関する明確な定義は今のところなされていないが，その状態を把握するためにYoung（1998）は，Internet Addiction Disorder（IAD）を作成した．ここでは，８項目のうちYesが５つ以上ある者を依存者，５つ未満の者を非依存者としている．

・インターネットに夢中になっていると思う．
・満足を得るために，インターネットに長い時間触れている．
・インターネットの使用時間を減らすことがうまくいかない．
・接続を切断するときに憂鬱な気持ちになる．
・意図したより長くインターネットに接続してしまう．
・インターネットのせいで，仕事や学校を休んだことがある．
・家族や友人と過ごすよりも，インターネットを使うことを選ぶことがある．
・日常生活でイヤなことがあるとネットに接続してそれを解消する．

グリフィス（Griffiths; 1998）は，インターネット依存症について，アルコール依存や薬物依存などの「物質依存」を基準とする立場で論じている[12]．

彼は，「インターネット依存症」にも適用可能な「依存」の概念として，以下の６つの基準を提唱している．

・生活の中で特定の行為についての思いが突出していること．
・その行為をしているときに周囲から見て雰囲気が変わること．
・その行為に対して耐性ができてしまうこと．
・特性の行為を中断されたり禁止されると落ち込むこと．
・その行為によって，自己の内外で葛藤が生じていること．
・長年の禁止やコントロールの後でもぶり返しがおこること．

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）の心理学教授パトリシア・グリーンフィールド博士は「感情を表すシグナルに対する感受性の低

下，つまり，他者の感情を理解する能力の低下」は，携帯電話やコンピューターの使いすぎによる代償のひとつだと述べている[13]．

一方，日本では小林ら（2001）の「寝食を忘れてインターネットにのめり込んだり，インターネットへの接続を止められない」と感じるなど，インターネットに精神的に依存した状態とした定義がある．しかし，本格的な研究が現状では少なく，どのような現象を主たる特徴とするかについて，まだ一定の見解を得るには到っていない[14]．

インターネット依存症はなぜ起きるのだろうか．研究者によって様々な定義がなされているが，ここでは代表的な研究を示す．

Young（1998）はインターネット依存症の原因として，匿名性，逃避性，利便性の３つを挙げ，これらの頭文字をとってACEと呼んでいる．匿名性とは，自分が今話をしている人を見ることができないという職別性の欠如のことをいう[15]．

Davis（2001）は，脆弱性ストレスモデル（Diathesis stress model）をインターネット依存症にも適用して説明している．脆弱性ストレスとは，環境からのストレスと個体側の脆弱性との関係によって精神的破綻が生じるとする理論である．このモデルによると，インターネット利用者はストレスによってインターネットに引き込まれ，これに利用者の不適応の認知が結びつくことによって，ネット依存症になるのではないかと考えている[16]．

彼は，このモデルに対応した認知行動療法を提唱した．彼はネット依存症回復を７段階に分けた．患者に，① ネット依存の定義，発生の原因を教え，回復の目標を作る．② 回復する時のルールを決める．③ インターネット利用の手段をやめる．④ インターネットに対して，認識を新たにする．⑤ 現実社会で，人とのコミュニケーションをとる．⑥ インターネットを離れた前後の変化を相談する．⑦ ネット依存症回復の過程を振り返る．

ネット依存によって，様々な問題を引き起こし，犯罪に繋がるような反社会的行動も生じている．米国のニューヨーク州のアルフレッド大学では，学生の留年や退学が過去の２倍以上にも激増したため調査を行った．その結果，中退者の52％がネット依存の状態であり，インターネットの乱用が原因で学生生活を崩壊させてしまったことが判明した[17]．

ネット先進国の韓国では，青少年の5-10％がネット依存者である可能性があり，2002年には，86時間休みなくオンラインゲームをやり続けた男性が突然死した[18]．

日本でも学生を中心にネット依存になる人が多くなり，学生相談の最近のトピックもネットに関する内容が多い．並行して非精神病性ひきこもりの増加や希薄な対人関係が取り沙汰されているが，ひきこもりをする人々の中にもネット依存者は多数存在するという．従って，世界におけるIT時代の潮流の中で，青年期の人々を中心にネット依存の問題が深刻化していると指摘されている（安澤，2009）[19]．

欧米に比べ，日本では「インターネット依存者」より「インターネット依存傾向者」が約半数程度いるとの報告がある．中国も「インターネット依存傾向者」が「インターネット依存者」より大幅に多いという研究もあり，「インターネット依存傾向」は「インターネット依存」より深刻な問題となっていると推測されるため，研究の必要性が示唆されている[20]．

2.2　中国青少年ネット依存症の拡大と問題

中国青少年インターネット協会は，青少年ネット依存症状況を把握するため，2005年と2009年に中国ネット依存症調査を行った．

『2009年中国青少年ネット依存報告』によると，６～29歳のネット依存青少年は約2,404.2万人．都市部だけでも，ネット依存症傾向がある青少年は約1,858.5万[21]．６～29歳のネット依存症青少年の人数が上昇し，18～23歳の青少年インターネット利用者のネット依存症人数が一番多かった．男性ネット依存青少年の比率は16.9％，2005年より低くなった．女性ネット依存症青少年の比

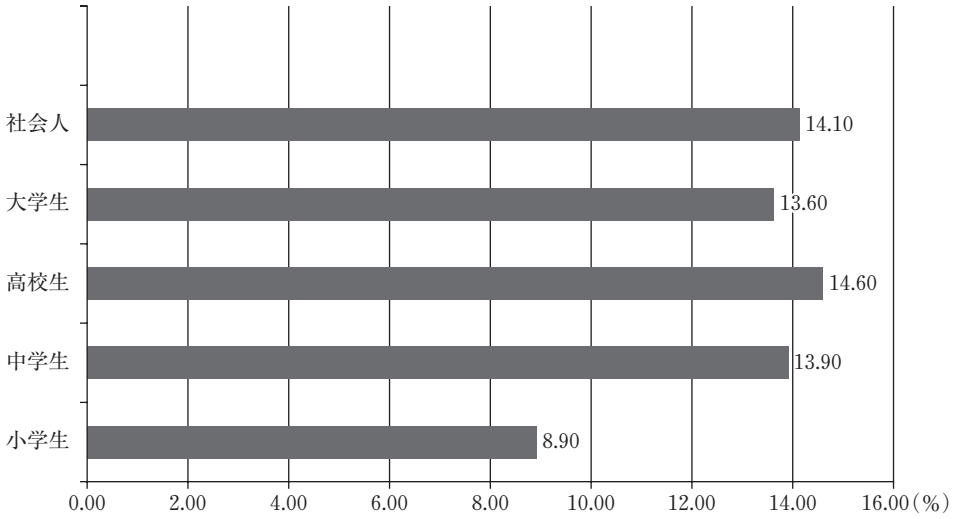

図 3　年齢別ネット依存症の発生率[22)]

率は11.3%，2005年より高くなった．

また，小学生のネット依存症発生率は8.9%．中学生のネット依存症発生率は13.9%．高校生のネット依存症発生率は14.6%．大学生と社会人のネット依存症発生率は13.6%と14.1%であった．（**図 3** 参照）

2.3　ネット依存症からの回復教育（韓国と日本の事例）

韓国ゲーム産業振興院では，2002年から 2 年間，ゲーム依存の子供たちの治療キャンプを数回にわたって行っている．ゲーム大会を開いて親子が一緒にゲーム対決をする．そんなところから，親がゲームに対する理解を深め，家庭で規制するならどのように規制するかを親自身が考える取り組みであった[23)]．

ゲームから芸術活動の方に興味を移させる 2 泊 3 日のコース，および 1 週間のコースを実施した結果，短期治療プログラムでは，ネット依存を治療するのは不可能だった．それに，「ゲーム治療キャンプ」には，注意が必要であるという警告の声が出た．そのキャンプに参加した子どもたちに対して，周囲が「ゲーム依存の子ども」という烙印を押してしまい社会問題となった[24)]．

日本の厚生労働省にあたる韓国政府の保健福祉家族部と韓国青少年相談院は，深刻化するネット依存症からの回復のために，国立中央少年修練院が主体となって寄宿型の治療プログラムの運営を始めた[25)]．

そこでは，レスキュースクールという治療法が実践されている．これは2007年から行われている事業で，ネット環境が全くない中で10泊以上を過ごす林間学校に類似したプログラムである．夏休みや，冬休みの期間に中学生男子，高校 1 年生男子，女子の 3 種類の合宿が設定され，全国16カ所で開催されている[26)]．

日本では，久里浜医療センターが長年の依存症治療で培った専門性をもとに，2011年 7 月から，ネット依存治療研究部門を開設し，治療を始めた．センターでは，ネット依存治療を行うとともに，ネット依存に関する研究と最新の情報収集にも取り組んでいる[27)]．

ここでのプログラムでは，以下 4 つの内容を実施しネット依存からの回復を目指している．① ネット依存を様々な角度から考え，具体的に生活をどのように変えていくかを考える認知行動療法．② 睡眠サイクルを整え，体力をつけるためのバトミントン，卓球，テニス，エアロバイク

などの日中の運動．③ 医師や看護師，栄養士，作業療法士などによる睡眠，運動，栄養，依存，健康問題などについてのレクチャー．④ 定期的な主治医の診察，様々な検査，体力測定．

3．中国におけるネット依存症の回復教育プログラム（研究１）

3.1　調査目的

ネット依存症青少年を対象とした回復教育学校やプログラムの実情を明らかにすること．ネット依存症回復教育内容，教員の構成，教員数，学生数などを整理する．

3.2　調査方法

中国の検索エンジン「百度」を使用して，2007年から2013年にかけて，中国におけるインターネット依存症回復教育学校やプログラムを検索し分類し考察した．ネット上の情報だけでは限界があるため，教育内容などが判明した主なもののみを考察対象とした．

3.3　結果と考察

3.3.1　ネット依存症青少年学校の検索結果（主な５校のみ）

中国におけるネット依存症回復教育学校（主な５校）において，教員の構成はほとんど同じであった．社会福祉士を備えた学校もあった．教育内容は，軍事訓練や野外活動の行動療法と，カウンセリングや文化教育の認知療法の２分野から構成されていた．

軍事訓練では，青少年をネット社会から一定期間切り離すことを目的としている．集団生活によって，自己意志を鍛え，回復のための覚悟を決めさせることを目的としていた．ネット依存の青少年は，対人関係における信頼感が育成されていないとし，野外生存体験で，人と人の信頼関係を作ることが狙いであった．また，ネット依存症青少年には，心理的な問題を抱えている場合が多く，心理療法は非常に重要であると，どの学校も認識していた．

表１　ネット依存症青少年回復教育を行っている主な学校[28)]

学校	場　所 設置年	性質	教育内容	教員の構成	教員数	学生数	夏休み プログラム
宜昌少年西点陽光学校	宜昌 2006	私立	軍事訓練 野外生存体験 文化教育 カウンセリング	心理学治療担当 退役軍人	15人	約100人	ある
南昌鴻傑少年学校	南昌 2007	私立	軍事訓練 文化教育 カウンセリング	心理学治療担当 退役軍人	不明	56人	なし
南昌維特成長専修学校	南昌 2006	私立	軍事訓練 野外生存体験 文化教育 カウンセリング	心理学治療担当 退役軍人	20人	不明	ある
北京啓徳励志教育中心	北京 2007	私立	軍事訓練 野外生存体験 文化教育 カウンセリング	心理学治療担当 社会福祉士 退役軍人	不明	不明	ある
励志少年軍校	徐州 2009	私立	軍事訓練 野外生存体験 カウンセリング	心理学治療担当 退役軍人	13人	不詳	ある

表 2　上海陽光青少年社会福祉中心2009年夏休みプログラムの予定表[29)]

	午　前	午　後	夕　方
1日目	入営式	入営式教育	自己紹介
2日目	謝恩教育	学歌	映画（軍事）
3日目	心理教育	山登り	なし
4日目	論語	エアロビクスダンス	体験感想
5日目	謝恩教育	スピーチ	映画（歴史）
6日目	心理教育	運動会	芸術交歓会
7日目	論語	山登り	映画（軍事）
8日目	謝恩教育	棋類ゲーム	１週間まとめ
9日目	心理教育	エアロビクスダンス	料理練習
10日目	論語	家事ゲーム	映画（歴史）
11日目	教育映画	スピーチ	体験感想
12日目	心理教育	軍事訓練のコンテスト	なし
13日目	レポート	体験感想まとめ	閉営式練習
14日目	閉営式		

1）毎日，朝6時，軍事練習．
2）毎日，１時間に，夏休み宿題を書く．
3）毎日，午後1時間，スポーツをする．
4）毎晩，自分の感想手紙を書く．

3.3.2　ネット依存症の回復教育を行っているプログラム

学校ではなく，期間限定で回復プログラムを実施している所もあった．上海陽光青少年社会福祉中心は，夏休み期間中にネット依存青少年を集め，上海近郊で野外生存体験というプログラムを実施していた．上海陽光青少年社会福祉中心は，約50人の専門社会福祉士が勤めていて，専門性は高いと思われる．

表 2 は，夏休みのネット中毒少年回復プログラムで，毎回30人ぐらいの少年が参加している．

４．南昌鴻傑少年学校の回復教育プログラム（研究２）

4.1　調 査 目 的

中国国内で最も回復プログラムが進んでいるとされる南昌鴻傑少年学校を実際に訪問し，視察するとともに，関係者にインタビューを行うことによって，① どんな診断標準でネット依存症を判断するのか，② どのような回復方法を実施するか，③ 回復学校での実際の活動などを明らかにする．この手続きを踏み，ネット依存症青少年がどのように行動を変容させていくのか，回復の有効性と学校存在の意義，さらに課題も含めて考察する．

4.2　調 査 対 象

中国江西省南昌市において2007年に設立された南昌鴻傑少年学校．同校は，中国において，唯一学歴（小中学校卒業資格）取得が認められるネット依存症回復学校．

4.3　調 査 期 間

2013年９月６日～９月７日

4.4　調 査 方 法

現地を訪問し，学内施設および生徒の活動状況を視察見学する．さらに，校長先生，教官長と心

理担当教員に，構成的面接法により調査を行った．

4.5　調 査 結 果

4.5.1 「网络妈妈（ネットお母さん）」と南昌鴻傑少年学校

南昌鴻傑少年学校は2007年設立され，ネット依存症を含め，あらゆる青少年問題から回復を目指している私立の回復学校である．同校は，中国江西省団省委に，私立的専門学校として登録された．現在のところ，中国唯一の初中学歴付回復学校である．つまり，小学校，中学校の卒業資格が取得できる学校である．

学校の名誉校長先生は，「ネットお母さん」と呼ばれた劉煥栄である（**写真１**）．劉は，少女のころ，火災で負傷し手が不自由になった．劉さん

写真１　劉煥栄と南昌鴻傑少年学校の生徒たち[30)]

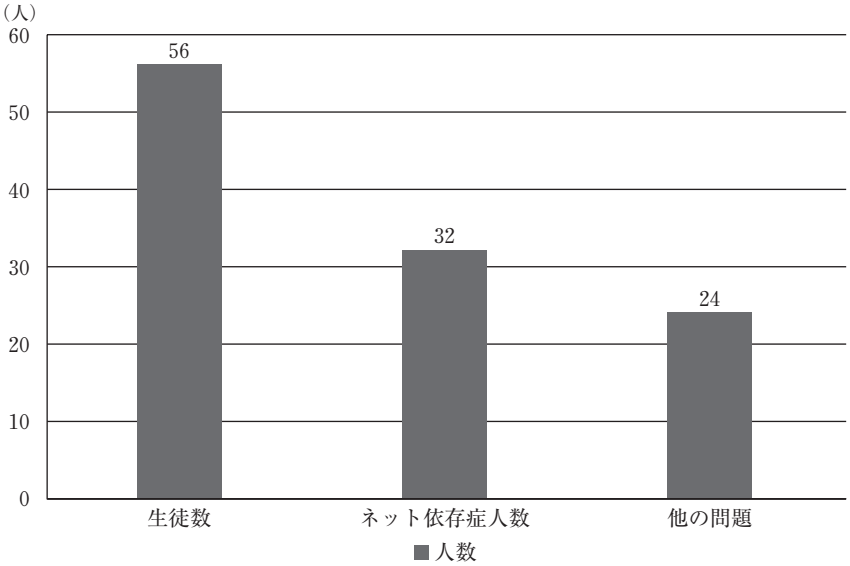

図４　南昌鴻傑少年学校在校生の問題の内訳（調査データより作成）

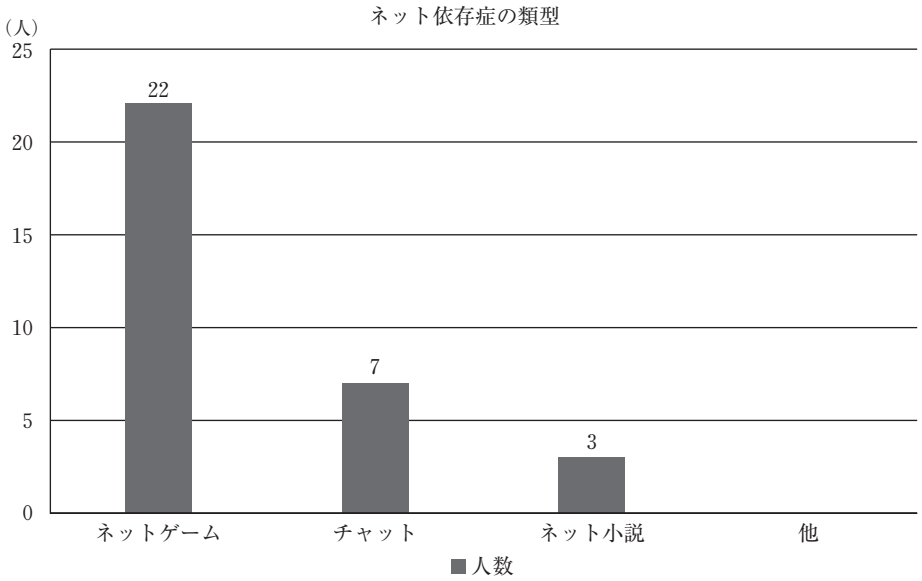

図５　南昌鴻傑少年学校ネット依存症の類型（調査データより作成）

は，QQという中国のインスタントメッセンジャーソフトを使って，ネット依存少年と対話することで，彼らをネット依存から救って来た．今までに，約300人の青少年がネット依存症から回復することができたとされている．2009年に劉煥栄の活動をテーマとして扱った映画「网络妈妈（ネットお母さん）」が全国で上映され，中国全土に大きな感動を与えた．これによって，南昌鴻傑少年学校は，中国で一躍有名になった．

4.5.2　生徒と依存症の内訳

調査時点で，56人の生徒がいた（**図４**）．うちネット依存症は，男性32人，女性０人．

さらに，32人うち，ネットゲーム依存症が22人，ネットチャット依存症が７人，ネット小説依存症が３人であることが分かった（**図５**）．

また，32人の生徒の中に，自分の入る学校は回復学校だということを認識していた生徒は６人しかいなかった．他の生徒は，父母に別の理由で諭され，回復学校に送られていた．一般的には，最初，父母が学校に連絡し，学校の状況を聞き，自分の子供を送る．子供が行きたくないと主張した場合，多くが親から説得されて，同校に送られて来ていた．

4.5.3　ネット依存症の判断基準

同校では，独自にネット依存症の判断基準を持っていた．以下８つ選択肢のうち，５つに該当すれば，ネット依存症と判断する．生徒が学校に到着して，すぐに確認する．

① いつもネットを利用したい．
② 満足感を得るために，ネットに大変長い時間触れている必要がある．
③ 思っているよりも長時間ネットを利用する．
④ ネットにアクセスできなければ，気持ちが落ち込む，不安．
⑤ ネットは現実逃避できる唯一の方法．
⑥ 家族や友だちに，自分がネットに依存していることを隠す．
⑦ ネット使用のために，家族，社会，職業など重要な活動の頻度が減少する．
⑧ ネット使用を減らすか制限しようとする欲求はあり，努力はするがうまくいかない．

4.5.4　学校関係者へのインタビュー結果

ネット依存症の原因について，廖勳彪校長は，「原因は３つがある．１つ目は生徒が現実から逃げたいと思っている．２つ目は生徒の性格が内気，コミュニケーションができない．３つ目は生

徒と両親との関係が良くない」と説明した．

また，熊正華教官長は，「ネットゲームをする時には，レベルをアップするとか，いい道具が欲しいとか，明確な目標がある．しかし，現実社会においては，生徒は自分が何をすべきかが分かっていない．現実に目標を設定できない．集中力が欠如する．結果的に，自信がなくなる」と述べた．

4.5.5　回 復 方 法

回復方法としては，行動療法と心理療法を同時に実施する．生徒たちが訓練に抵抗があれば，心理療法担当教員がカウンセリングして，生徒の気持ちに配慮しながら訓練を続けるという．

同学校には，「2-14様式」というソーシャルグループワーク方法がある，２というのは，教員が２人，つまり訓練の教官１人と心理療法担当の教員１人の２人で，14は生徒が14人．教員は，毎日生徒と同じ寮で生活する．グループの目標というのは，生徒がネット依存症から回復することであり，その目標を全員が認識してプログラムを継続

写真２　軍事訓練の様子（筆者撮影）

写真３　迷彩服を着て訓練を受ける生徒たち（筆者撮影）

する．

生徒は入学後に，毎日，迷彩服を着て，軍事訓練をする．

行動療法は，軍事訓練と野外生活体験の２分野から構成される．軍事訓練は朝７時，午後２時と夜７時に，毎日３回行われる．野外生活体験は１学期に１回実施される．軍事訓練の内容は基本教練と基礎格闘技である．火曜日と土曜日の午後は格闘技，他は全部基本教練である．野外生活体験は，基本的にはオリエンテーリングである．

心理療法の１つは，ネット依存症の心理状態を把握するための相談．軍事訓練時，心理担当教員は，グラウンドに立って，生徒たちの状態を観察する．もし問題があったら，就寝前に，心理相談を実施する．２つ目は，適切なインターネットの利用方法を教えること．

生徒たちが抱える問題を確認するために，生徒が入学してきた１週間の間は，毎日カウンセリングを行い，生徒の心理状態を把握する．

同校は，体罰ではなく，「奨励教育」を基本としている．

「奨励教育」は６つの原則がある．

1．「生徒を信頼する」．生徒を信用し，頼りにすること．
2．「生徒を尊敬する」．生徒の人格を認める．
3．「生徒を理解する」．生徒がネット依存症になった理由，原因を理解する．
4．「生徒を激励する」．生徒を励まし，元気づける．
5．「生徒を寛容する」．生徒の意見，考え方に対して理解し許容する．
6．「生徒を注視する」．生徒に心を集中させて気をつける．

心理療法担当教員の黄敏先生によれば，回復治療効果は，半年のうちに再発する可能性は低い．この５年間のうち，１学期間の回復授業を受けて，再発して戻って来た学生は２人しかいないという．

再発の原因は，家庭教育がよくないと考えられる．自宅に戻っても，父母たちがあまり関心がなく，再びネット依存症に陥ることを防げなかったからである．

廖勳彪校長によれば，同校は，学費が高い．６カ月間の学費は9,600元（約15万円）．長期治療を受けた学生がいない．学校は初中学歴が発行できるので，これから生徒が増えるかも知れないと予測している．

同校では，小中学校の教育課程をすべて教える．学校には物理実験室，化学実験室をそろえている．教育課程を準備していないネット依存症回復学校に送られた生徒は，義務教育を受けられない．ネット依存症から回復しても，社会に戻っても進学，就職ができない．そうなると，再びネット依存症になる可能性があると廖校長は指摘した．

4.5.6　課　　題

南昌鴻傑少年学校には，いくつかの課題がある．１つ目は，運営上の問題で，２年連続で赤字となった．政府からの支援もないため，学費を値上げすることにしたという．他のネット依存症回復学校で死傷事故が発生したという記事が，2007年ごろから掲載されるようになり，その影響もあって，入学者が減少してきていたという．

２つ目の課題は，たとえ同校で治療を受けてネット依存症から回復したとしても，父母に関心がないと，自宅に戻ってまた再発する可能性があるということ．そのため，学校側は，月に１回卒業生の父母に連絡して，状態を聞くことにしている．しかし，時々親が協力してくれないことがある．原因は，子供を再度，回復学校に送ることがとても恥ずかしいと考えているためだという．

５．結　　論

5.1　中国におけるネット依存症の回復教育プログラム

夏休みや冬休みなどに実施される短期ネット依存症回復プログラム，総合病院のネット依存症専門科，学歴なしの私立青少年問題回復学校，学歴付きの私立青少年問題回復学校，と４種類の回復教育プログラムがあった．

5.2　南昌鴻傑少年学校の回復教育プログラム

2007年に設立された唯一の小中学校卒業資格付きの青少年問題回復学校．映画「网络妈妈（ネットお母さん）」の大ヒットで，中国全土で一躍有名になった．

調査時点で56人の生徒がいた．ネット依存症は32人．うちネットゲーム依存症が22人，ネットチャット依存症が７人，ネット小説依存症が３人であった．

同校は，独自のネット依存症の判断基準を持っていた．８つの基準のうち５つ以上該当した場合は，ネット依存症と判断していた．

廖勳彪校長は，ネット依存症の生徒の特徴は３つあると指摘した．１つ目は生徒が現実から逃げたいと思っていること．２つ目は生徒の性格が内気，コミュニケーションができないこと．３つ目は，生徒と両親との関係が良くないこと．

また，熊正華教官長は，「ネットゲームをする時には，明確な目標がある．しかし，一方で現実社会においては，生徒は自分が何をすべきであるかが分かっていない．現実に目標を設定できない．集中力が欠如する．結果的に，自信がなくなる」と説明した．

回復方法としては，行動療法と心理療法を同時に実施する．「2-14様式」というソーシャルグループワーク方法で体制をとっている．行動療法は，軍事訓練と野外生活体験の２分野から構成される．また，心理療法は２つの方法で構成されていた．１つは，ネット依存症の心理状態を把握するための相談．２つ目は，適切なインターネットの利用方法を教えること．同校は，体罰ではなく，「奨励教育」を基本としている．「奨励教育」は６つの原則がある．

課題は，赤字であること．そして，生徒がネット依存症から回復して自宅に帰っても，親に関心がないと元のネット依存にもどってしまうこと．学校から連絡しても，親が恥だと感じて協力してくれないことなどがあることが分かった．

注

1）　http://v.ku6.com/show/bW-qRzDkXqa9tX-X.html
2）　http://news.sina.com.cn/s/2009-04-09/071317573826.shtml
3）　http://edu.163.com/09/0804/09/5FS3FVJS00293I4V.html
4）　http://news.xinhuanet.com/legal/2012-11/07/c_123924842.htm
5）　CNNIC：『第36回中国インターネット発展状況統計報告』2016.
6）　CNNIC：『第36回中国インターネット発展状況統計報告』2016.
7）　中国青少年インターネット協会：『2009年青少年ネット中毒調査報告』2010.

8）　Ivan Goldberg Experts debates on internet addiction Physorg. com. 2006-11-14. Retrieved 2009-08-09.
9）　Young, K.S. Internet addiction: The emergence of anew clinical disorder. Cyber Psychology and Behavior, 1 (3), 237-244 (1998).
10）　American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition American Psychiatric Association (1994).
11）　World Health Organization The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders: Clinical descriptions and diagnostic guidelines (blue book). World Health Organization (1992).
12）　Griffiths, M Internet addiction: Does it really exist? In J. Gackenbach (Ed) Psychology and the Internet: Intrapersonal, interpersonal, and transpersonal implications (pp. 61-75). San Diego, CA: Academic Press (1998).
13）　DAVID N. GREENFIELD Psychological Characteristics of Compulsive Internet Use: A Preliminary Analysis CyberPsychology & Behavior. OCTOBER 1999, 2 (5): 403-412. doi: 10.1089/cpb.1999.2.403.
14）　小林久美子・坂元章・足立にれか・内藤まゆみ・井出久里恵・坂元桂・高比良美詠子・米澤宣義『大学生のインターネット中毒―中毒症状の分布と関連する要因の検討』日本心理学会第65回大会発表論文集，863（2001）.
15）　Young, K. S Caught in the net: How to recognize the signs of internet addiction and a winning strategy for recovery Willey (1998).

16） Davis RA. A cognitive-behavior model of pathological Internet use. Computer in Human Behavior 115 (2001).
17） 春日伸予・伊藤克人『芝浦工業大学生のインターネット依存に関する調査研究』芝浦工業大学研究報告　人文系編 38(2)1(2004).
18） 斎藤環『韓国のネット依存者たちに学ぶ』中央公論 119(9), 46(2004).
19） 安澤好秀『インターネットへの依存傾向の実態と心理的要因に関する一考察―強迫および回避との関連性を主眼に』臨床心理学研究　7 142　東京国際大学（2009).
20） 王霞・和田正人『中国と日本の大学生のインターネット依存傾向』東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　65: 437-458, 2014.
21） 中国青少年インターネット協会『2009年中国青少年ネット依存報告』2010.
22）『2009年中国青少年ネット依存報告』（中国青少年インターネット協会, 2010）を基に作図した.
23） 樋口進『ネット依存症』PHP 新書　2014.
24） 樋口進『ネット依存症』PHP 新書　2014.
25） 樋口進『ネット依存症』PHP 新書　2014.
26） 樋口進『ネット依存症』PHP 新書　2014.
27） 久里浜医療センターホームページ http: //www.kurihama-med.jp/tiar/index.html
28） 検索結果を基に作表した.
29） 上海陽光青少年社会福祉中心のパンフレットを基に作表した.
30） 南昌鴻傑少年学校提供.

参 考 文 献

〈日本語〉
芦崎治『論苑 ネットゲームに依存し現実を見失う人びと第三文明』596　24-28　第三文明社（2009）
安藤玲子『インターネットによる新しい交友関係の構築と人生満足感および社会的効力感』日本心理学会第64回大会ワークショップ報告（2000）
王霞・和田正人『中国と日本の大学生のインターネット依存傾向』東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ　65: 437- 458（2014）
春日伸予・伊藤克人『芝浦工業大学生のインターネット依存に関する調査研究』芝浦工業大学研究報告人文系編38（21）1（2004）
金山健一・竹内和雄『中学生の携帯電話依存とライフスタイルの関係, 日本教育心理学会総会発表論文集』52　490（2010）
香山リカ『ゲーム・ネット依存の心理とその功罪（特集 傷ついた子どものこころを癒す)』精神科12(1) 36-39（2008）
河井大介『SNS 依存者の生活習慣的影響と利用機能の分析2010年 A 社 SNS 調査結果より社会情報学研究』日本社会情報学会誌16(2) 57-170　32（2012）
キンバリー・ヤング（小田嶋由美子訳）『インターネット中毒―まじめな警告です』毎日新聞社（1998）
黒田一彌・高田雅彬・岳五一『インターネット依存症の実態調査と分析』パーソナルコンピュータ利用技術学会全国大会講演論文集 5　13-16（2010）
小林久美子・坂元章・足立にれか・内藤まゆみ・井出久里恵・坂元桂・高比良美詠子・米澤宣義『大学生のインターネット中毒―中毒症状の分布と関連する要因の検討』日本心理学会第65回大会発表論文集　863（2001）
斎藤環『韓国のネット依存者たちに学ぶ』中央公論 119(9) 46（2004）
坂西秀美『インターネット依存と心理的要因―パソコンと携帯電話の比較』臨床心理学研究 9　141-161（2011）
ダイヤモンド社『１日７時間も利用！　驚くべき小学生のケータイ依存の実態（特集　子ども危機―この国で産み育てるリスク）―（危機現代の子どもを狙うネット, 携帯の罠)』週刊ダイヤモンド97（30）（2009）
鄭艶花『日本の大学生の“インターネット依存傾向測定尺度”作成の試み』心理臨床学研究 25(1) 102-107（2007）
鄭艶花『インターネット依存傾向と日常的精神健康に関する実証的研究』心理臨床学研究 26(1) 72-83（2008）
独立行政法人 日本貿易振興機構 JETRO『東南アジアにおけるインターネット普及状況と SNS 調査』1　2012-03 DB（2012）
樋口進 『ネット依存症』PHP 新書　2014
安澤好秀『インターネットへの依存傾向の実態と心理的要因に関する一考察―強迫および回避との関連性を主眼に』臨床心理学研究 7　142　東京国際大学（2009）
龍一世『インタネット依存とその測定について―インターネット依存傾向尺度作成の試み』奈良大学大学院研究年報　第18号 84-85（2013）

〈英文〉

American Psychiatric Association Diagnostic and Statistical Manual of Mental

DAVID N. GREENFIELD Psychological Characteristics of Compulsive Internet Use： A Preliminary Analysis CyberPsychology & Behavior. OCTOBER 1999, 2 (5)：403-412. doi：10.1089/cpb.1999.2.403.

Davis RA. A cognitive-behavior model of pathological Internet use. Computer in Human Behavior 115 (2001)

Disorders Fourth Edition American Psychiatric Association (1994)

Griffiths, M Internet addiction： Does it really exist? In J. Gackenbach (Ed) Psychology and the Internet： Intrapersonal, interpersonal, and transpersonal implications (pp. 61-75). San Diego, CA： Academic Press (1998)

Ivan Goldberg Experts debates on internet addiction Physorg.com. 2006-11-14. Retrieved 2009-08-09.

Young, K . S Caught in the net： How to recognize the signs of internet addiction and a winning strategy for recovery Willey (1998)

Young, K. S. Internet addiction： The emergence of anew clinical disorder. Cyber Psychology and 10, Behavior, 1 (3), 237-244 (1998)

World Health Organization The ICD-10 Classification of Mental and Behavioral Disorders: Clinical descriptions and diagnostic guidelines (blue book). World Health Organization (1992)

〈中国語〉

张竺君《大学生网络成瘾倾向多因素研究》,《健康心理学杂志》P279-280　2003

王雁飞《社会支持与身心健康关系研究述评》,《心理科学》第27期(5) P1175-1177　2004

《国外不让孩子沉迷网络管理各有高招》,《光明日报》2005

王娅妮，张宗堂：《对违法网吧处罚太轻了》,《中国青年报》2006

《本市将成立“戒网瘾诊疗所”》,《青年报》2007

陶然　应力　岳晓东等《网络成瘾探析与干预》，上海人民出版社　2007

王佳敏:《报名家长多数误诊孩子网瘾》,《青年报》2007

李健，赵飞鹏:《代表委员呼吁预防青少年网络迷失》,《中国青年报》2007

赵飞鹏，李健:《网瘾猛于虎，监管谁担责》,《中国青年报》2007

新华社:《国家禁止炒卖网吧经营许可证》,《青年报》2007

司徒夏雷:《我们的网络世界还缺什么？》,《中国青年报》2007

乐毅:《整顿网吧不能只靠封杀》,《中国青年报》2007，北京

新华社:《胡锦涛昨主持政治局会议：加强青少年体育工作和网络文化 建设》,《青年报》2007

新华社:《用“e管家”监控孩子上网》,《青年报》2007

新华社:《虚拟警察将上岗网上“扫黄”》,《青年报》2007

张景勇:《“网络黄祸”肆虐，救救孩子！》,《中国青年报》2007

江南 :《“网游防沉迷系统”能有效吗？》,《东方早报》2007

何春申:《十部委联合组织打击网络淫秽色情专项行动》,《中国青年报》2007

陶然　黄秀琴　刘彩谊等《网络成瘾临床诊断标准的制定》,《解放军医学杂志》第33期　P1188-1191　2008

中国青少年网络协会《2009年中国青少年网瘾报告》2010

王微笑《大学生网瘾问题浅析》,《学理论》2011

陈立新《青少年网瘾解决之道在素质教育》,《山西财经大学学报》P150　2011

〈Web サイト〉

重慶大東方行走学校事件 http://v.ku6.com/show/bW-qRzDkXqa9tX-X.html

新疆華龍青少年成長研究中心事件 http://news.sina.com.cn/s/2009-04-09/071317573826.shtml

南寧起航挽救訓練営事件 http://edu.163.com/09/0804/09/5FS3FVJS00293I4V.html

武漢にある行走学校事件 http://news.xinhuanet.com/legal/2012-11/07/c_123924842.htm

久里浜医療センターホームページ

http://www.kurihama-med.jp/tiar/index.html

http://v.ku6.com/show/bW-qRzDkXqa9tX-X.html